備えあれば

一宮中・３　伊藤　彪雅

令和六年一月一日、午後四時十分。

僕は家でのんびりと、好きなゲームをしながら正月を満喫していた。お年玉ももらえたし、夜更かしも許されて、幸せな気分で過ごしていた。そんなとき、突然違和感を覚えた。めまいのような感覚があり、ゲームのやり過ぎで目が疲れたかと思った瞬間、家が揺れていた。いつも静かな父親が「地震だ。」と声を発した。すかさず祖母や母親はドアを開けて、避難経路を確保していた。これって南海トラフなのかと数秒揺れている間に考え、どうしようと不安になった。少し待つと揺れもなくなり、テレビから聞こえたのは、北陸で地震があったという情報だった。この辺じゃないなら、南海トラフではないってことかと安心した。

でも、それ以降テレビでは、「津波が来るから危険です。」と、豊川とは比べものにならない光景が放送されていた。帰省している人たちもいた様子で、普段よりも能登半島には人が多く集まっていた。だから、被害も大きくなっていた。幸せから一気にどん底へということが実際にあることを知った。正月だというのに、なんというスタートなのだろうと、急にテンションが下がった。

翌日になっても地震のニュースが流れていて、親戚との会話もそのことばかりだった。そんなとき、弟が「地震の揺れってどのくらい怖いのかな。」と口にした。実際には、家族もそれほど大きな地震を経験したことがないため、想像でしか話ができない様子だった。すると、急に母親が「じゃあ、体験してみようか。」と言い、何やらインターネットで調べ始めた。

数日後、家族で出かけることになった。目的地は静岡県だった。買い物にでも行くのかと思っていたが、到着したのはどこかの施設だった。予約をしていたらしく、時間通りに施設に入っていくと、地震に関することを学ぶ場所だとわかった。静岡県地震防災センターという施設で、東海地震に立ち向かうための知識と技術の向上、防災意識の高揚を図るとともに、自主防災組織の活性化を図ることを目的とするために建てられた場所だった。ここは、地震だけではなく、豪雨災害や土砂災害なども学べる場所だった。

能登半島地震があったせいか、その日は、僕にとってはタイミングが悪く、静岡テレビの撮影が入りますと突然言われた。インタビューする人が一緒にツアーに入りながら、カメラで撮影しますとのことだった。そういうのは苦手だから最悪だと思っていたが、弟はなんだか嬉しそうだった。

施設の中では、どこにプレートがあり、どのように地盤にずれが生じると地震になるのか、縦揺れや横揺れの違い、液状化現象と地盤沈下についても、目で見て体験しながら学ぶことができた。

そして、興味があった地震体験コーナーでは、実際の揺れを体験することができた。家族の中でいちばん楽しみにしていたのは弟だったが、まだ小学生だったので、震度六弱までしか体験できず悔しがっていた。僕は中学生だから震度七まで体験することができた。最初はアトラクションに乗るくらいの気持ちでいたが、普通に立っていられなかった。今から揺れがくると構えていたから手すりを握ったり、踏ん張ったりすることができたが、急に揺れがきて、何もつかまるものがない場所だったら、自分の身を守る自信がない。それくらい恐怖を感じた。

そのあとは、防災備蓄品の展示を見た。非常食や、実際になったときにあると便利なものを紹介しているコーナーだった。大人はそこがいちばん興味ある様子だった。僕の家でも、水や数日分の食料は準備していると聞いたことがあり、実際に見たこともあった。でも、大人たちが反応していたのは、トイレについてだった。確かに、

生きていればトイレは必要だ。オムツで過ごすなんて考えられないし、嫌だ。そんなときに便利なのは凝固剤だと教えてもらった。母親は、「すぐに注文しなきゃ。」とメモを取っていた。

　そして、施設を見終わったあと、テレビ局の人がインタビューに協力してくれないかと言ってきた。僕は絶対に嫌だったので断ったが、弟と父親は受け入れていた。実際に撮影している様子を後ろで見ていると、弟が「地震が来たら出口を確保して机の下に隠れて、地震がおさまったらすぐに外に出て身の安全を確保したいです。」と落ち着いて答えていた。いつもふざけている弟が、とても立派に見えた。それを見て、自分だったら急な質問に答えられただろうかと考えてみたが、「きっと正しい答えを模索して、なかなか答えることができなかったと思う。こういう場面で、瞬時に考え、対応するスキルも、災害時には必要なのかもしれない。そう思うと、いつの間にかそれを身につけている弟が羨ましく思えた。数日後、愛知県では観ることができなかったが、インターネットで静岡テレビを観ることができた。弟のインタビューの一部が採用されていた。それは、僕が立派だと感じた、あの場面だった。

　周りと同じだと安心できるのが今の僕。しかし、実際には自分で考えて行動する方が、後悔しないということも、なんとなく気づき始めている。防災について学びにいったはずなのに、決断力も必要なのだと気づくことができた。

　「自分の身は自分で守る」そのためにできることを、今から少しずつ鍛えていこうと思う。今の自分に足りないことは多過ぎる。常に余裕をもって行動すること、困ったときに助けてほしいと口にすること、自分のことは自分でやることなど、少し考えてもたくさんある。だからこそ、周りから吸収できることは素直に吸収して、自分のものにしていきたいと思う。僕の周りで大地震が起こらないことを祈るが、そんな日が来ても冷静に対応できる大人になりたい。

　そう思っていたのも束の間だった。

令和六年八月八日、午後四時四十三分。

　この地震の影響を受けて、南海トラフ地震注意報が発令された。まだ先のことだと思っていたが、こんなにも早く来るとは。今の僕には心の準備はできていると思っていたその矢先だった。そして、不幸は重なることがあると知った。

令和六年九月、能登半島豪雨。

家々を飲み込む濁流。同じ中学三年生の子も行方不明というニュースが流れた。自分だったら恐怖におびえているだろう。

　災害の中で生きる経験もなく、何不自由なく暮らしている僕。今、こうして好きなことができる環境があるのは、当たり前ではない。だからこそ、大人になる準備段階に入ったことを自覚し、もし来た「その日」に、自分と周りの人達を守るために、少しずつ備えていこう。